

レポート

第45回米国カロリメトリー会議および
“ウェストラムシンポジウム”に参加して

高橋 洋一

1990年7月23日から27日まで、米国ミシガン州アーバーのミシガン大学キャンパスで、恒例の米国カロリメトリー会議が開催された。今回の会合は例年にくらべて2つの特記すべき点があった。その1は会議の最終日に表題にも示した“Westrum symposium”が開催されたことで、その2は、例の常温核融合研究に触発されたと思われる「Application of calorimetry to electrochemical processes」と題するセッションが持たれた、ということである。

ミシガン大学は私にとっては25年前の留学の思い出のある懐かしいところであり、当時の恩師の Edgar F. Westrum Jr. 教授の定年退職・名誉教授就任を記念してのこの会議であって見れば、何をおいても馳せ参じた次第であった。同じくウェストラム先生と旧知の千原秀昭先生のお顔も見え、日本からは阪大の稲葉・山室両博士と全部で4名、全出席者が150名ほどの和気あいの雰囲気気の会議であった。

私自身は最終日を目当てに会議日程の後半から参加したので、特別講演や一般セッションについては割愛せざるを得ないが、唯一間に合って顔を出すことのできた前述の「電気化学プロセスへのカロリメトリーの応用」のセッションは大変興味深かった。エネルギーを連続的に外から注入し、また多くの場合は物質の出入りもある、というどう見ても精密カロリメトリーに全くふさわしくないシステムへの応用が、常温核融合の「過剰熱」の検証に決定的に重要な役割を持つこととなったわけで、この会議では、いわばプロフェッショナルのカロリメトリストがこれについてどのように対応し、どう結論したかに興味を持たれた。詳細については別の機会にゆずるが、結論としては大勢は予想通り「No」であったがこれに対し果敢に反論する者もあり、激論の末双方納得せず時間切れ、という場面もあった。

ミシガン大学のウェストラム教授は、熱測定討論会での特別講演をはじめ、Bulletin of Chemical Thermodynamics, J. Chem. Thermodyn. あるいは IUPAC や CODATA などの精力的な活動でわが国でも顔なじみの方が少なくないであろう。今回の「Westrum symposium」は同教授の米国カロリメトリー会議への永年の貢献を称えるために企画された。前夜にはウェストラム教授私邸にシンポジウム参加者全員が招待され、インフォーマルな“Jollification party”が開催された。世界中から同教授の同僚や数多くの弟子が集まって、大盛会であった。

7月27日の当日には、まず今回の会合の組織委員長の Weir 教授から、ウェストラム教授のこれまでの業績の詳細な紹介があった。500篇余の論文に示される多彩な活動をいくつかの分野に整理して、よく準備された紹介講演であった。数多くの研究協力者達の名前を個々にあげること避けた講演の中で、同教授の最近のもっとも注目すべき成果として、「…極めて優秀な日本大学院生、駒田紀一との協同研究としての新しいフォノン密度分布モデルに基づく格子熱容量の導出…」と紹介されたことも強く印象に残った。この日の



写真 Westrum banquet でのウェストラム教授夫妻

東京大学工学部：東京都文京区本郷7-3-1 〒113

15篇の報告は、J. Chem. Thermodyn. に「ウエストラム教授記念号」として刊行される予定, とのことであったが、いずれも聞きごたえのある報告であった。記念行事は近くのホテルでの盛大な「Westrum banquet」をもって幕を閉じた。

ウエストラム先生は、ミシガン大学名誉教授の地位を得て、引きつづき同大学の研究室でカロリメトリーの研究をつづけられる。このところやや健康をそこねがちのウエストラム先生の今後の御健勝と研究の一層の発展をお祈りしつつ、アナーバーを後にした。